20250112　降誕節第３主日新年礼拝

司式:佃　雅之
奏楽:吉田千鶴子

前奏:「神のひとり子、主なるキリスト」(D.ブクステフーデ)

招詞: 65:19 わたしはエルサレムを喜びとし／わたしの民を楽しみとする。泣く声、叫ぶ声は、再びその中に響くことがない。(イザ65:19)

讃美歌 8「心の底より」

交読詩編 37:7-22

07 沈黙して主に向かい、主を待ち焦がれよ。繁栄の道を行く者や／悪だくみをする者のことでいら立つな。
08 怒りを解き、憤りを捨てよ。自分も悪事を謀ろうと、いら立ってはならない。
09 悪事を謀る者は断たれ／主に望みをおく人は、地を継ぐ。
10 しばらくすれば、主に逆らう者は消え去る。彼のいた所を調べてみよ、彼は消え去っている。
11 貧しい人は地を継ぎ／豊かな平和に自らをゆだねるであろう。
12 主に従う人に向かって／主に逆らう者はたくらみ、牙をむくが
13 主は彼を笑われる。彼に定めの日が来るのを見ておられるから。
14 主に逆らう者は剣を抜き、弓を引き絞り／貧しい人、乏しい人を倒そうとし／まっすぐに歩む人を屠ろうとするが
15 その剣はかえって自分の胸を貫き／弓は折れるであろう。
16 主に従う人が持っている物は僅かでも／主に逆らう者、権力ある者の富にまさる。
17 主は御自分に逆らう者の腕を折り／従う人を支えてくださる。
18 無垢な人の生涯を／主は知っていてくださる。彼らはとこしえに嗣業を持つであろう。
19 災いがふりかかっても、うろたえることなく／飢饉が起こっても飽き足りていられる。
20 しかし、主に逆らい敵対する者は必ず滅びる／献げ物の小羊が焼き尽くされて煙となるように。
21 主に逆らう者は、借りたものも返さない。主に従う人は憐れんで施す。
22 神の祝福を受けた人は地を継ぐ。神の呪いを受けた者は断たれる。

朗読聖書①列王記下 1:9-12

09 アハズヤは五十人隊の長を、その部下五十人と共にエリヤのもとに遣わした。隊長がエリヤのもとに上って行くと、エリヤは山の頂に座っていた。隊長が、「神の人よ、王が、『降りて来なさい』と命じておられます」と言うと、
10 エリヤは五十人隊の長に答えて、「わたしが神の人であれば、天から火が降って来て、あなたと五十人の部下を焼き尽くすだろう」と言った。すると、天から火が降って来て、隊長と五十人の部下を焼き尽くした。
11 王は再びもう一人の五十人隊の長を、その部下五十人と共にエリヤのもとに遣わした。隊長が、「神の人よ、王が、『急いで降りて来なさい』と命じておられます」と言いかけると、
12 エリヤは彼らに答えて、「わたしが神の人であれば、天から火が降って来て、あなたと五十人の部下を焼き尽くすだろう」と言った。すると、天から神の火が降って来て、隊長と五十人の部下を焼き尽くした。

朗読聖書②ルカによる福音書 9:49-56

◆逆らわない者は味方
49 そこで、ヨハネが言った。「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見ましたが、わたしたちと一緒にあなたに従わないので、やめさせようとしました。」
50 イエスは言われた。「やめさせてはならない。あなたがたに逆らわない者は、あなたがたの味方なのである。」
◆サマリア人から歓迎されない
51 イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。
52 そして、先に使いの者を出された。彼らは行って、イエスのために準備しようと、サマリア人の村に入った。
53 しかし、村人はイエスを歓迎しなかった。イエスがエルサレムを目指して進んでおられたからである。
54 弟子のヤコブとヨハネはそれを見て、「主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか」と言った。
55 イエスは振り向いて二人を戒められた。
56 そして、一行は別の村に行った。

祈祷

天地の創造主にして全能なる生ける真の神、あなたの聖名を褒め称えます。

主なる神、私たちはこの朝、あなたを礼拝する為に、この礼拝堂に、またライブ配信によって御前に集まりました。この小さく弱い群れをあなたが祝福してくださいますように切にお願い致します。

主よ、私たちは御前にあって、あなたが示してくださった愛を、あなたが与えてくださる恵みを思うとき、ここに呼び集められるに相応しくない者であることを思います。日々の生活の中で、いつもあなたに近づき、あなたと共に生きている者らしくあろうとしながらも、かえってあなたの名を汚すような歩でありましたことを、ここに告白しなければなりません。時にあなたが与えてくださった信仰を忘れ、あなたが分け与えてくださった賜物を、あなたの栄光のためにではなく、自分の栄光のために用いたことが、どれほど多かったことでしょう。主よ、どうか、そのような私たちの罪を赦し、“神の子”と呼ばれる者に、キリストの弟子として生きる者に相応しく造り替えてください。

主よ、御言葉をお語りください。あなたがここに臨み、繰り返し、“わたしの愛する子よ”と、私たちを呼んでくださいますようにお願い致します。あなたの恵みの御言葉が、今日ここに献げられます礼拝において、私たちの肉体にも心にも深く刻み付けられますようにと祈ります。

平和の主よ、人間同士の争いが続いています。多くの人が地上の権力者たちの罪の犠牲になっています。主よ、どうか、この地上で人間の力ではなく、あなたの御力のみが振るわれますように。そのために私たちが悪に対して、信仰によって戦うことができますように、私たちを強めてください。

主よ、世界で、また日本の各地でも、自然災害、事故、感染症の猛威などに苦しんでいる方が多くおります。あなたが共にいてください。今、各地で献げられています礼拝によって、あなたの御声が大きなものとなりますように。真の救い、真の希望がどこにあるのか、一人でも多くの人が、“イエスは主なり”告白することが出来ますように、教会の働きを助けてくださいますようにと切に祈ります。

憐れみ深き主よ、願いつつも集い得ない兄弟たち姉妹たちの上に、あなたが必要な言葉をもって臨んでください。孤独の寂しさ、老いの寂しさを覚えている友がいます。迷い、戸惑いの中に留まっている友もおります。真の慰め主であるあなたが、その一人ひとりを訪ねてください。励まし、導き、戒め、癒し、一人ひとりに、あなたの祝福と恵みを豊かに注いでくださいますようにお願い致します。

主よ、あなたが今日の礼拝に説教を備えて下さったことを感謝致します。今、鮎川健一牧師は、ご自宅で痛みに耐えながら、この礼拝に共に与っています。教会のため、土屋長老のために祈っておられることでしょう。あなたがお二人を聖霊によって一つとしてください。説教を準備した者と語る者を一つとして、今、あなたの口として用いてくださいますようにと切に祈ります。今日この礼拝で取次がれます御言葉が、あなた御自身が語って下さったものとして、私たちの心に深く届きますように、あなたの助けを求めます。

これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌 517「神の民よ」

説教:「主にある友」　　鮎川健一(土屋昌子代読)

西暦 2025 年を迎え、私たちは再び主の恵みに押し出されて、宣教の業、信仰に生きる者として主日の礼拝を献げます。

昨年の降誕節より守り続けてきた時節は、1 月 6 日の公現日(Epiphany)から次の教会歴を進みます。この公現日後の時節は、様々な角度から力ある業と教えとによって、イエス・キリストが天の父を指し示し、神をはっきりと示された出来事を思い起こす時となっています。それによって天地万物の造り主なる唯一の神との交わりに生かされていることを覚えます。

私たちはこの幸いな交わりの中に置かれていますが、一つの危険、一つの黒い誘惑とも言うべきものと隣り合わせであることにも心しておかなければなりません。それは信仰の正しい内容を問う前に、日常的な営みの中で起こる事態です。内と外、仲間とそうでない人たちとの区別の間で生じる傲慢な思いが少なからず存在しているということ。教会においても、自分の教会の人や気の合う仲間は善い人で、教会にいない人や自分たちと違う人は悪い。自分たちは正しく外は悪、内は清く、外は穢れている。もっとはっきり言えば、内は味方で外は敵という、何とも狭い心、傲慢、自己満足に陥っている現実世界があります。ともすると、周囲の教会に対する受け止め方や、態度、姿勢においても、自分の教会だけが正しい、偉い、聖い、神に守られている、祝福されているなどの態度が当てはまる事態です。私自身の 40 年近くに及ぶ教会生活を思い起こしてみましても、よく見聞きしたことは、自分たちは唯一の神を知っている、イエス・キリストを知っている、聖書もよく読んで理解している、祈りも欠かさない、礼拝も欠かさない、自分たちは神に従い努力した、認められた、救われた、しかし、世の人は神を知らず、救いも知らない、などと声高らかに教会の外へ響かせる人々がいるのです。今でもこのようなことがまかり通るように言われますが、自分たち以外の人を見下し、毛嫌いすることはいかがなものかと思います。

私たちが救われたのは、一方的な神の恵み、神の憐れみによるのであって、自分たちの日頃の行いや思い、育ちの優劣で決定されたのではないのですから、全く私たちには何の手柄も名誉もないのです。教会に人が増えるとか、受洗者が現れることも然りです。牧師一個人の努力の成果でもありません。たとえ祈りを以ってしたとしても、功績や実績の勝算は私たちには与えられませんし、私たち自身が求める報償でもないわけです。私たちはただただ主に捉えられて救われたことを喜び、感謝をする者ですから、自分たち以外の者を見くびったり、軽んじたりしてはならないのです。また、そうする必要もないわけです。それは究極的には、まだキリストを知らない、信じていない、その人のためにも、主イエスは十字架につき、死から命へと向かわれたからにほかなりません。

それでは、私たちに向けられる主の眼差しと、キリスト・イエスを知らない人に対しての眼差しは違うのでしょうか。むしろ知っているにもかかわらず、拒み続けたり、間違った身勝手な言動にあっては違いがあるでしょうけれども、スタートラインは皆同じです。このキリストの眼差しを忘れると、聖書にある“**『然り』を『然り』、『否』を『否』とせよ』なとせよ(マタ 5:37)**”ということを取り違えて、全く別の解釈で自分たちの仲間意識というものに支配され、傲慢になり、キリストを知らない、あるいは信じていない人より多くの深い罪を犯すことになります。私たちは日本という島国にあって、様々な面において内と外という意識を、このキリストのゆえに乗り越えていく者として召されています。私たちの交わりの中心はこの内と外とを超えて、全ての物を主の愛の眼差しの中に見出し、御手の内に収めておられる主ご自身を見ることにあります。そこに生まれるのが真の交わり、主イエスの愛の共同体です。

さて、今朝の御言葉から 49 節を見ますと、主の弟子たちは自分の仲間以外の者が主イエスの名によって悪霊を追い出しているのを見て止めさせようとしています。“**主を自分たちの仲間とし、自分たち以外の者が主の聖名を使うことは腑に落ちない**”という弟子たちの気持ちは仲間意識が強ければ強いほど抱くものであろうとは少なからず理解はできます。しかし主はこう言われました。「**やめさせてはならない。あなたがたに逆らわない者は、あなたがたの味方なのである。**」**(50 節)**。主は“**自分たちに直接逆らったり、攻撃したりしない人は味方だ**”と言われました。これは興味深い言葉です。弟子たちは自分たちと同じでない者は、真向から『**敵**』と考えました。しかし、主は“**あからさまに敵でない限り味方だ**”と言われた。どの時代、どの世界にあっても、人間社会にあっては敵を作るのは得意でも味方を作るのは苦手になりがちです。しかし、主は弟子たちに“**自分たちの仲間以外の者も受け入れなさい**”と教えられます。ここで主は権力、差別、支配欲に駆られるユダヤ社会にいながらにして、既に、内と外、仲間とそれ以外の人々の垣根を越えておられます。なぜなら、主イエスは自分を信じて従うキリスト者だけの主・王ではなく、天地を造られた神の御子として、全世界に至って全ての生きる者の主・王であられるからです。私たちは主が、「**わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。**」**(ヨハ 10:16)**”と言われたことを思い起こします。私たちは主に養われる羊であり、教会という囲いの中に置かれています。しかし、教会という囲いの外にも主によって導かれなければならない羊がいます。私たちの宣教活動はそこに在り続けます。

伝道の第一歩は、主を知らない人を私たちが味方と言えるか、その人の友人なれるかにかかっています。それは何も藪から棒にその人を褒め称え、何でも無条件で赦すということではなく、その人が主イエスとともに歩む信仰者として導かれるように祈れるか否か、ということです。ニコニコと接することが求められている根本的かつ重要な問題ではありません。教会、牧師、信徒にとって、キリスト信仰と道徳、倫理、哲学は別のものです。ここに理解と受け止めのズレや不十分さ、方向違いが大きく現れます。

聖書に戻りますと、主の一行はサマリア人の村を通ることになりました。主が来られることを知らせるため、弟子が先に備えをするために使いに出されました。ところが、その村の人々はイエスを歓迎しませんでした。ヤコブとヨハネは、「**主よ、お望みなら、天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか**」

と過激な発言をします。この二人の弟子は大変気性が激しかったようで、マルコ福音書(3:17)では「**ボアネルゲス**(Βοανηργές)」(**ヘブル語「雷の子ら」ボネ・レゲ゛シュ(בְּנֵי רֶגֶשׁ)という名を主から付けられた**」ほどでした。この時、「**シモンにはペテロ**(Πέτρος[岩])**という名が付けられました**」(16節)。その後もシモンは“**ペテロ**”と言われ続けましたが、ヤコブとヨハネはその後の教会の歴史の中で、“**ボアネルゲス(雷の子ら)**”とは呼ばれなくなりました。これには後ほど触れます。このような名を主からいただいたものですから、この二人の気性の荒さは想像に難くありません。彼らにすれば、“**自分たちのメシア、真の王・救い主を歓迎しないとは、なんと無礼な罰当たりだ**”と気が収まらなかったのでしょう。しかし、当時サマリア人とユダヤ人は犬猿の仲でしたから、サマリア人の対応は日常的な態度、姿勢だったのです。むしろそれを知らない方が大問題になります。それでもヤコブとヨハネは腹の虫がおさまらず、勢いに任せて暴言を吐いたと理解できます。

そこで私たちは自分が大切にしている方を、自分以外の人が同じように大切にしてくれるとは限らないということを芯から受け止める必要があります。日曜日の礼拝も然りです。異教の地と言われる日本でキリスト者であることから、このような場面に日常的に出会い、そのことと真っ向から向き合わざるをえないことも事実です。反対に礼拝を揶揄され無視されるたびに、「**天から火を降**」していたらどうでしょうか。日本という国は存在しなくなります。ユダヤの地でも同じようでした。このとき、主は、心荒れる二人の弟子を戒め、別の村に行かれました。無用な衝突を避けるためでした。これもまた主が私たちに教えてくださっている知恵となります。

私自身、日常的に様々に言いたいこと、言わなければならないことがありますが、いまだに黙していることが多々あり、ストレスも疾うに限界に達して今に至る者です。たとえ真っ当な正当的な意見でも、それを言ったからとて改善されるものでもなく、現状を受け止めることを強いられます。様々に思いが募りますが、その中で主の思い、主の御業の恵みに置かれていることは何よりの幸い、救いです。

さて、非常に激しい思いを口にした二人の弟子ですが、兄のヤコブは12使徒の中で最初の殉教者となりました(使12:2)。そして弟のヨハネは長生きしてエフェソの教会で牧会を続けたと記録(伝承)に残されています。彼が記した書簡が新約聖書に三つ収められています。この『**ヨハネの書簡**』で繰り返されているのは、“**互いに愛し合いなさい**(Ⅰヨハ3:11)”という言葉です。ヨハネは繰り返し神の愛を語る手紙を書きました。それゆえに、“**愛の使徒ヨハネ**”と呼ばれるようになりました。「**雷の子**」が“**愛の使徒**”に変えられていったのです。私たちはこのことを大切に受け取りたいと思います。主の弟子も元々は味方を作ることが苦手で、敵を作るのは天下一品の他者を追従させないほどの強者(つわもの)たちだったのです。自分たちと違うものに腹を立て、容赦しない者でした。しかし、主の救いに与り、主の恵みの御業を告げる者として召されていく中で、主の愛に生きる人に変えられていったのです。私たち自身も洗礼から聖餐への恵みによってそのように変えられ、成長して行くことを与えられ、その出来事を受け止める者とされています。

主の愛は外に向かって溢れて行きます。主から注がれる愛は涸れることのない命の泉です。この外に溢れ出した愛によって、心の内に、教会に、キリストの命の泉が湧き上がっていることが証しされていきます。それも決して甘く飲みやすい水ということではなく、キリストに繋がる硬い水、はじめは消化不良を起こすほどの純粋な水です。ミネラル豊富な水が体質に合わない人がいる、決して受け付けない人がいることからも充分理解できます。人の思いが先走るこの世の姿ですが、改めて2024年を振り返り、新たな主の年2025年を歩み出したこの時に、なお主のご降誕・クリスマスの恵みを受けて今ある思い、“**いと高きところには栄光神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。**”(ルカ2:14)と祈り願いつつ、“**インマヌエル**(Ἐμμανουήλ)(マタ1:23)「**神我らと共におられる**〈עִמָּנוּ אֵל(インマヌ・エル) イザ7:14〉」、**ゆえにわれら神と共にいます。**”との信仰告白を心深く抱き、死を超えた永遠なる真の命をもたらすキリストの豊かさに希望をもって歩み続けたいと願います。

共に祈りを献げましょう。

恵みと憐れみに富み給う、主イエス・キリストの父なる神さま、新たな年を迎え、主と共に生かされている恵みに感謝致します。

私たち人間は罪の中に生まれ、肉に属するものですが、主は、“**誰でも水と霊から生まれなければ、神の国に入ることはできない。**(ヨハ3:5)”との御言葉により、罪の赦しと新しい命とを与えるために、洗礼の御業を備えてくださいました。どうか夫々があなたからの大いなる恵みを思い起こし、さらに豊かに、また正しき信仰に導かれますよう願います。また新たに教会に連なる者が与えられますよう祈り願いつつ、信仰生活を全うすることができますよう導いてください。上よりの力を切に願います。

あなたの御力が注がれる全ての諸教会を祝し、御心のままに祈りを聞き挙げてください。新たな年の志にある祈りに合わせ、尊き主の聖名によって御前にお献げ致します。アーメン。

讃美歌:458「信仰こそ旅路を」

献金・感謝(高橋真軌)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

神さま、会堂で、またライブ配信で共に礼拝を献げることが許されましたことを心より感謝申し上げます。

説教を通して、豊かに御言葉を与えてくださり感謝致します。鮎川先生の怪我からの早い回復をお祈り致します。また代読された土屋昌子長老を感謝致します。私たちはこのような経験を通して、今、日本の教会で説教の代読により礼拝を守っている教会が少なからずあることを思い起こします。どうか、この日本で御言葉のために奮闘している諸教会をあなたが祝してくださいますように。

私たちは必要な物を与えられ、主の僕として生きて行くことが赦されていますが、このように祈るときに、貧困や命の危険の中にある人々のこと思います。私たちが今献げた物は神さまから戴いた物です。それをここにお返しすると同時に、この闇の世に力を振るわれる神さまの御用のために、この献金の他、私たちの全てを、どうぞ御心のままに用いてください。

主が教えてくださった「**主の祈り**」を共に祈り、私たちのこの一週間の新しい日々を迎えさせてください。「**主の祈り**」…**アーメン。**

派遣:讃美歌88「心に愛を」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなた方一同とともにあるように。アーメン。

報告:社会委員会チラシ:難民支援献品のお願いの説明、他。

後奏:「たえにうるわしや暁の星よ」(G.P.テレマン)